様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　６ 年　６ 月 １７ 日現在

機関番号：３２６２９
研究種目：基盤研究(B)（一般）
研究期間：2019～2021
課題番号：１９Ｈ０１６８３

研究課題名（和文）生徒と歴史教育との学習レリバンス構築に関する事例収集・分析とそのデータベース化

研究課題名（英文）Collection and analysis of lessons on the construction of learning relevance between students and history education.

研究代表者
二井　正浩（Nii, Masahiro）

成蹊大学・経済学部・教授

研究者番号：２０３５３３７８

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　13,300,000円

研究成果の概要（和文）：　本研究は「米英独などの諸外国では、どのようにして生徒と歴史教育との間にレリバンスを構築しようとしているのか」という中心的問いを立て，レリバンス構築に関わる歴史教育の好事例や先進的な研究を諸外国に求め，それらを収集・分析してデータベース化して広く日本の歴史教育関係者に情報提供した。
　代表的な成果としては2022年に『レリバンスの視点からの歴史教育論－日・米・英・独の事例研究－』，2023年に『レリバンスを構築する歴史授業の論理と実践－諸外国および日本の事例研究－』を刊行がある。また，諸学会における口頭発表及び論文発表，Webページの利用などによる成果の公開も行った。

研究成果の学術的意義や社会的意義
歴史教育における子どもの興味や関心などに基づいて歴史の学習内容を構成するアプローチの研究・カリキュラム・歴史授業実践の好事例を収集・分析し，報告・公開することによって，日本国内における歴史教育さらにはその他の社会系教科教育における学習レリバンス研究の潮流を生み出し，深化させることに成功した。
　また，分析から得た知見として，例えば，歴史教育において生徒が「自分事としての問い」「実存的な問い」を追究する事例を収集し・分析し，その重要性を提言できたことは意義深い。

研究成果の概要（英文）：　This study asked the main question "How do other countries, such as the USA, UK and Germany, try to build a relevance between students and history education?", sought good examples and advanced research on history education related to relevance building in other countries, collected and analysed them, and made them into a database to be widely used in history education researchers and by history teachers in Japan.
　The results of this research were published in 2022 as "Theory of History Education from the Perspective of Relevance: Case Studies of Japan, the US, the UK and Germany", and in 2023 and as " The Logic and Practice of History Teaching to Build Relevance: Case Studies of Other Countries and Japan". And the results of this research were reported at various conferences, also published on the webpage (https://history-lessons.site/).

研究分野：歴史教育，社会科教育

キーワード：レリバンス　自分事　自己関与性　歴史教育　社会科　地理歴史科

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１（共通）

１．研究開始当初の背景

日本の歴史教育は，国政史と国際関係史が中心となっており，子どもたちの生活感覚とはかけ離れた学習となっている。そのため，学習への子どもの自己関与性の担保，言いかえれば，子どもにとっての「自分事」としての意識，つまり「学習レリバンス」が希薄になっている。これが「歴史は暗記科目」という意識を生み，歴史学習離れを生じさせる本質的な問題となっている。

本来，レリバンス（relevance）とは関連性・意義という意味であり，ここで言う「学習レリバンス」とは，子どもにとって学習がどのような意味や意義をもっているかという概念として 2003 年に本田由起が提起した概念である。ただ，この「学習レリバンス」を正面からとりあげた歴史教育の研究･実践は日本では研究開始当初ではほとんど見あたらない実態であった。一方，諸外国，例えば，米国においては 1990 年代以降，社会科における子どもの文脈に着目した学びについての研究が着々と進められ，英国においても歴史的思考の触発や深化のためのツールの開発が試みられ，2010 年代に「歴史的エンパシー」の研究等も注目されるようになってきていた。また，ドイツにおいても過去の歴史にどう向き合い，関わり合うかを学習内容に取り入れる方向で子どもの「学習レリバンス」を高める試みがなされるようになってきていた。

また，2018 年に告示された高等学校学習指導要領では「主体的・対話的で深い学び」を実現し，「学びに向かう力・人間性の涵養等」といった資質・能力を培うという方向性が強調された。地理歴史科でも「歴史総合」「日本史探究」「世界史探究」といった科目が新設され，生徒自らが過去に向かって「問い」を表現する活動が重視されることになった。このような学習活動では，生徒が歴史と自己との間にレリバンスを構築することが重視される。その意味からも，生徒と歴史教育との間に「学習レリバンス」を構築するための研究が急務となっていた。

２．研究の目的

本研究課題の核心をなす問いは「歴史教育研究，歴史教育カリキュラム，歴史授業実践の三層において，諸外国では「学習レリバンス」の構築をどう実現しようとしているか」である。そして，研究の成果を日本で歴史教育に携わる関係者（研究者・教師など）に提供し，日本の歴史教育をレリバンスの視点から改革するための研究や実践の進展に寄与することをめざす。

３．研究の方法

従来の歴史授業研究・実践は，学習指導要領の内容や教師の意図した教育内容に対して，“ 子どもを如何にして歴史教育内容に近づけるか”，つまり歴史の学習内容に対して子どもの興味や関心などを如何に喚起するかというアプローチがなされてきた。しかし，レリバンスの視点からは，このアプローチとは逆に“歴史教育内容を如何にして子どもに近づけるか”，つまり子どもの興味や関心などに基づいて歴史の学習内容を構成するというアプローチも設定できるはずである。本研究では，このようなアプローチによる歴史教育研究，歴史教育カリキュラム，歴史授業実践の好事例を収集・分析し，報告・公開する。

４．研究成果

本研究のねらいは，歴史教育内容と生徒との間にレリバンスを構築する事例を収集・分析し，報告・公開することである．従って，ここでは本研究の代表的成果物として刊行した『レリバンスの視点からの歴史教育改革論－日・米・英・独の事例研究－』と『レリバンスを構築する歴史授業の論理と実践－諸外国および日本の事例研究－』について，研究代表者および分担者がどのような事例を収集・分析し，その成果を報告・公開しているか，そしてその反響について報告する．

2022 年 3 月に刊行した『レリバンスの視点からの歴史教育改革論－日・米・英・独の事例研究－』は三部構成となっており，「第 1 部 日本の歴史教育改革とレリバンス論」では、二井が「第 1 章 “歴史総合”の新設とレリバンス論の必要性」において，2018 年告示の高等学校学習指導要領地理歴史科に見られる歴史教育改革について分析し、新設科目「歴史総合」の単元構造をレリバンス構築の視点から評価した。「第 2 章 生徒が歴史授業に見出すレリバンスの質的検討」において宮本は，日本国内で実践した新科目「世界史探究」の授業におけるレリバンス構築について「問い」に着目して分析した。また，「第 3 章 レリバンス論とその射程」において田中は，歴史教育におけるレリバンスの視点の困難さとその重要性・可能性について A. シュッツのレリバンス論に立ち返り，米国 C3 フレームワークにおける探究学習に見られる学習レリバンス構築について論じた。

「第 2 部 諸外国におけるレリバンスの視点からの歴史カリキュラム改革」では、原田が「第 4 章 米国の新・新社会科期のレリバンス論」で 1970 年代の米国社会科で見られた“ 歴史レリバンス運動 ”を取り上げ，米国の失敗を分析し，その失敗にどう学ぶべきかについて問題提起した．「第 5 章 米国に見る学習レリバンス構築のための主題的歴史カリキュラム構成論」において中村は，近年の米国社会科の歴史カリキュラムに見られるレリバンス構築の事例を分析し、現在の日本の歴史教育改革に生かす手がかりを提示した．また，「第 6 章 生徒の動機づけを図

る学習レリバンス構築のための歴史学習」において宇都宮は，ドイツ BW 州の歴史カリキュラムと歴史教科書の分析を行い，レリバンスの構築をめざす歴史単元構成の特徴を整理した．

「第 3 部 諸外国におけるレリバンスの視点からの歴史学習・評価改革」では、空が「第 7 章 生徒の感情に関与することを重視する米国の歴史学習プログラム」で米国の NPO「歴史と私たち自身に向き合う」（Facing History and Ourselves）」の開発した「ホロコーストと人間行動」（Holocaust and Human Behavior）の実践をとりあげ、学習者の感情的な関与を伴う歴史学習について分析した。「第 8 章 英国における評価問題を手がかりとした歴史学習のレリバンス」において竹中は，英国の中等教育資格試験（GCSE：General Certificate of Secondary Education）を題材に、英国の歴史学習におけるレリバンスの実情の解明を試みた。最後の「第 9 章 歴史政策問題のヒストリー学習／メタ・ヒストリー学習に基づく歴史授業」において服部は，ドイツの諸州で行われている歴史政策（過去についての公的取り扱いに関わる政策）を扱う歴史学習を類型化し分析して、学習レリバンスの構築の論理を論じた。

2023 年 3 月に刊行した『レリバンスを構築する歴史授業の論理と実践－諸外国および日本の事例研究－』も三部構成になっており，「第 1 部 レリバンスを重視する諸外国の歴史授業構成と実践」では、二井が「第 1 章 レリバンスの構築をめざす歴史カリキュラムの内容構成と実践」において，カナダ・オンタリオ州で収集した高校教師 Robert Flosman の「博物館作り」の授業記録と入手した資料を用いながら、個人的レリバンス・社会的レリバンスを構築する授業とカリキュラムの実際について報告した．「第 2 章 生徒を学びに向かわせる教師の営みとしての単元の構成」において空は，米国・マサチューセッツ州で収集した授業の観察記録と資料を用いながら，生徒を学習へと向かわせる教師の営みという観点から実践を分析し，レリバンスを構築する上で単元の構成が重要であることについて考察した．

「第 2 部 諸外国の歴史教育に見られるレリバンスの論理」では，原田が「第 3 章 英国ニュー・ヒストリーのレリバンス論」において，英国 SCHP の提起した歴史シラバスと評価（テスト）問題を手がかりに、レリバンスの構築を目指すニュー・ヒストリーの授業論を分析し，米国の新・新社会科が保守派の巻き返しに遭って失敗のとは対照的に、SCHP が後の英国歴史教育に大きな影響を及ぼすことのできた理由について分析した．「第 4 章 シビックエンゲージメントの視点に基づく歴史教育改革論」において中村は，シビックエンゲージメント（市民が自分たちのコミュニティ、学校、国、世界にみられる問題やニーズを特定し是正すること）の視点に基づく歴史教育改革論を提起している J・D・ノークスの理論と米国史カリキュラムを検討し，歴史教育改革する上での可能性と意義をレリバンスの視点から考察した。また，「第 5 部 ドイツにおけるレリバンスに基づく学習構想と歴史教育の展望」において宇都宮はドイツにおけるコンピテンシー志向の歴史教育の流れの中から生じたレリバンスへの着目の動きについて分析した．そして「第 6 章 ドイツ中等歴史教育における現在との関連化」において服部は，ドイツの中等歴史教育における「歴史文化」の取り扱いについて、単元とカリキュラムの各レベルでの多様性をとらえるとともに、それらの取り扱いの共通性をさぐり、歴史教育における「現在との関連」という観点から検討した．

「第 3 部 レリバンスを重視する歴史授業の創造と展望」では，田中が「第 7 章 目的動機（行為）と理由動機（反省）から見た学びの可能性と有意味性」において，日本の中学校において実施した P4C に基づく歴史授業実践を事例に、歴史教育とレリバンスの関係を実態的に分析した．「第 8 章 歴史的探究学習のおける学習レリバンスの検討」において宮本は，科学教育におけるラーニング・プログレッションズ（LPs）研究の駆動問題（driving question）とその構成を参考にして、実際に高等学校地理歴史科の世界史単元を構想・実践・分析し、問いの構築学習における学習者の駆動性の論理を明らかにし，単元を通じて生徒が構築した実際の問いと学習レリバンスの関係について検討した．また，「第 9 章 英国の評価問題分析を踏まえた“歴史総合”の授業試案の構想」において竹中は，英国の評価問題分析からをもとに，レリバンスの観点から「歴史総合」の実践に関して一つの可能性を示すために授業試案を提案した。

これらの『レリバンスの視点からの歴史教育改革論－日・米・英・独の事例研究－』と『レリバンスを構築する歴史授業の論理と実践－諸外国および日本の事例研究－』は，現在，多くの学会発表や学会誌での引用に用いられている．そして同時に国内の歴史教育関係者からの注目を集め，例えば『レリバンスの視点からの歴史教育改革論－日・米・英・独の事例研究－』は，2022 年度高大連携歴史教育研究大会第２分科会の課題図書に選定されたり，2022 年度筑波大学附属中学校研究協議会社会科部会での協議主題設定に活用されるなどした。また，『レリバンスを構築する歴史授業の論理と実践－諸外国および日本の事例研究－』の出版を契機にして，2023 年度社会系教科教育学会（2024 年 2 月 17 日）の研究大会テーマに学習レリバンスが取り上げられ（テーマ：社会系教科教育カリキュラムにおけるレリバンス構築のあり方），大会シンポジウムや分科会で学習レリバンスについての報告・議論が行われた．これらのことからも，今回取り組んだ研究課題「生徒と歴史教育との学習レリバンス構築に関する事例収集・分析とそのデータベース化」は、歴史教育さらにはその他の社会系教科教育における学習レリバンス研究の潮流を確実に生み出していると言える。

なお，科研を通じて収集・分析した授業データは，対象学校の許可を得られたものについては Web（諸外国における歴史授業実践：https://history-lessons.site）に広く公開している．

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計20件（うち査読付論文　5件／うち国際共著　0件／うちオープンアクセス　0件）

１．著者名 服部一秀	４．巻 26
２．論文標題 社会に開かれた歴史教育はどうありうるかー歴史政策問題学習に基づく社会形成教育ー	５．発行年 2021年
３．雑誌名 山梨大学教育学部附属教育実践総合センター『教育実践学研究』	６．最初と最後の頁 59-72
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 服部一秀	４．巻 140
２．論文標題 小学校中学年社会科におけるメタヒストリー学習の方略－ドイツ事実教授教科書の分析から－	５．発行年 2020年
３．雑誌名 『社会科教育研究』	６．最初と最後の頁 53-65
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 宇都宮明子	４．巻 59(3)
２．論文標題 深い学びを通して歴史的分野固有の資質・能力を育成する	５．発行年 2021年
３．雑誌名 『社会科教育』	６．最初と最後の頁 23-32
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 宮本英征	４．巻 59(9)
２．論文標題 新しい歴史的思考力と学習レリバンス	５．発行年 2021年
３．雑誌名 『社会科教育』	６．最初と最後の頁 18-21
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 宮本英征	4．巻 21
2．論文標題 歴史教育における探究学習の研究 ―社会認識形成と市民的資質育成を視点として―	5．発行年 2021年
3．雑誌名 玉川大学教育学部紀要『論叢』	6．最初と最後の頁 73-93
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 空健太	4．巻 7
2．論文標題 歴史総合「近代化と私たち」の指導と評価の提案	5．発行年 2021年
3．雑誌名 『世界史教育研究』	6．最初と最後の頁 107-116
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 二井正浩	4．巻 59(9)
2．論文標題 グローバルヒストリーとこれからの歴史教育	5．発行年 2021年
3．雑誌名 『社会科教育』	6．最初と最後の頁 22-25
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 宇都宮明子	4．巻 59(9)
2．論文標題 歴史を探究し、表現する歴史授業の転換に向けて	5．発行年 2021年
3．雑誌名 『社会科教育』	6．最初と最後の頁 4-9
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 二井正浩	４．巻 2022年度2学期
２．論文標題 「世界史探究」の授業づくりーどう変わらなければならないのかー	５．発行年 2022年
３．雑誌名 帝国書院『ChiReKo』	６．最初と最後の頁 6-9
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 二井正浩	４．巻 2020年11月号
２．論文標題 これからの「歴史授業」とは何かー学びの視点から考えるー	５．発行年 2020年
３．雑誌名 『社会科教育』	６．最初と最後の頁 4-7
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 原田智仁	４．巻 50号
２．論文標題 今こそ教科内容のレリバンスの研究を	５．発行年 2021年
３．雑誌名 日本教材文化研究財団 研究紀要	６．最初と最後の頁 28-31
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 原田智仁	４．巻 2021年6月号
２．論文標題 アメリカの社会科教育から学ぶー深い学びのための探究デザインモデルー	５．発行年 2021年
３．雑誌名 『社会科教育』	６．最初と最後の頁 32-35
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 中村洋樹	4．巻 45
2．論文標題 高校世界史授業における論述指導の目的に関する考察	5．発行年 2021年
3．雑誌名 関西教育学会年報	6．最初と最後の頁 126-130
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 中村洋樹	4．巻 31
2．論文標題 高校世界史における教科固有性に根ざした汎用的能力の育成―論述指導と評価実践に着目して―	5．発行年 2021年
3．雑誌名 教育目標・評価学会紀要	6．最初と最後の頁 43-52
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 中村洋樹	4．巻 58
2．論文標題 教師の力量形成に研究会はどのような役割を果たしているのか―私立高校の世界史教師の事例から―	5．発行年 2022年
3．雑誌名 全歴研研究紀要	6．最初と最後の頁 53-5753-57
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 服部一秀	4．巻 1027
2．論文標題 高等学校地理歴史科における学習指導と学習評価の展望	5．発行年 2021年
3．雑誌名 『中等教育資料』	6．最初と最後の頁 10-11
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 宇都宮明子	4．巻 第3巻
2．論文標題 自己調整学習としての歴史授業とその評価方略の提案－高等学校「日本史探究」における授業を事例に－	5．発行年 2023年
3．雑誌名 『社会系教科教育学論叢』	6．最初と最後の頁 59-68
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 二井正浩	4．巻 第4巻
2．論文標題 レリバンスの構築をめざす歴史教育の可能性ー歴史教育において「実存的な問い」にどう向き合わせるかー	5．発行年 2024年
3．雑誌名 『社会系教科教育学論叢』	6．最初と最後の頁 －
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 宮本英征	4．巻 第4巻
2．論文標題 生徒の「駆動」を追跡する評価方法の検討ー変革的アセッス面とを視野に入れてー	5．発行年 2024年
3．雑誌名 『社会系教科教育学論叢』	6．最初と最後の頁 －
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 竹中伸夫	4．巻 第61号
2．論文標題 英国と我が国の歴史教育事情	5．発行年 2022年
3．雑誌名 日英教育学会ニューズレター	6．最初と最後の頁 7-8
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

〔学会発表〕　計12件（うち招待講演　0件／うち国際学会　0件）

1．発表者名 竹中伸夫
2．発表標題 持続可能な社会の担い手を育成する社会科の授業づくりー英国の評価問題づくりを踏まえた歴史総合の授業構想を手掛かりにー
3．学会等名 熊本県社会科教育学会第15回研究大会
4．発表年 2022年

1．発表者名 中村洋樹
2．発表標題 〈さあ、「歴史総合」をしよう②〉生徒は、どのように歴史を “ 自分ごと ” としているのか？―教材共有サイトの実践―
3．学会等名 高大連携歴史教育研究会第8回大会
4．発表年 2022年

1．発表者名 中村洋樹
2．発表標題 高校歴史系科目における歴史的リテラシー概念の検討―ジェフリー・D・ノークスの理論を手がかりにして―
3．学会等名 教育目標・評価学会第33回大会
4．発表年 2022年

1．発表者名 二井正浩
2．発表標題 新科目『歴史総合』は国境や民族をどう乗り越えようとしているのか？
3．学会等名 第29回グローバル教育学会全国大会
4．発表年 2022年

１．発表者名 中村洋樹
２．発表標題 教師の力量形成に研究会はどのような役割を果たしているのか―私立高校の世界史教師の事例から―
３．学会等名 全国歴史教育研究協議会
４．発表年 2021年

１．発表者名 服部一秀
２．発表標題 後期中等歴史教育の導入単元／終末単元における歴史文化の学習の特質－ドイツ諸州の事例より－
３．学会等名 社会系教科教育学会第35回研究発表大会
４．発表年 2024年

１．発表者名 二井正浩
２．発表標題 レリバンスの構築をめざす歴史教育の可能性－歴史教育において「実存的な問い（一人称の問い）にどう向き合わせるか－
３．学会等名 社会系教科教育学会第35回研究発表大会シンポジウム
４．発表年 2024年

１．発表者名 二井正浩
２．発表標題 ケイパビリティと歴史教育におけるレリバンスの構築－新科目「歴史総合」と英国PGCE教材「Human Being?」を事例にー
３．学会等名 日本地理学会2024年春期学術大会
４．発表年 2024年

１．発表者名 宮本英征
２．発表標題 生徒の「起動（driving）」を追跡する評価方法の検討ー歴史探究学習・問いの構築学習の場合ー
３．学会等名 日本社会科教育学会第73回全国研究大会
４．発表年 2023年

１．発表者名 宮本英征
２．発表標題 歴史学習における生徒の駆動性の論理－問いの構築学習の場合－
３．学会等名 日本社会科教育学会第72回全国研究大会
４．発表年 2022年

１．発表者名 二井正浩
２．発表標題 地理歴史科の新科目「歴史総合」における探究的な問い
３．学会等名 日本科学教育学会
４．発表年 2024年

１．発表者名 服部一秀
２．発表標題 社会に開かれた歴史教育はどうありうるかードイツでの歴史授業観察からー
３．学会等名 社会系教科教育学会第31回研究発表大会
４．発表年 2020年

〔図書〕　計6件

1．著者名 二井正浩，宮本英征，田中伸，原田智仁，中村洋樹，宇都宮明子，空健太，竹中伸夫，服部一秀	4．発行年 2022年
2．出版社 風間書房	5．総ページ数 224
3．書名 レリバンスの視点からの歴史教育改革論ー日・米・英・独の事例研究ー	

1．著者名 二井正浩，空健太，原田智仁，中村洋樹，宇都宮明子，羽鳥一秀，田中伸，宮本英征，竹中伸夫	4．発行年 2023年
2．出版社 風間書房	5．総ページ数 290
3．書名 レリバンスを構築する歴史授業の論理と実践ーー諸外国および日本の事例研究	

1．著者名 原田智仁 ほか	4．発行年 2022年
2．出版社 教育情報出版	5．総ページ数 192
3．書名 初等社会科教育の理論と実践 －学びのレリバンスを求めて－	

1．著者名 關浩和，吉川芳則，河邊昭子，二井正浩，原田智仁 ほか	4．発行年 2024年
2．出版社 風間書房	5．総ページ数 410
3．書名 レリバンスの構築を目指す令和型学校教育	

１．著者名 土屋武志，真島聖子，白井克尚，二井正浩，原田智仁 ほか	４．発行年 2024年
２．出版社 日本文教出版	５．総ページ数 250
３．書名 子どもがつながる社会科の展開	

１．著者名 井野瀬久美惠，二井正浩 ほか	４．発行年 2023年
２．出版社 清水書院	５．総ページ数 256
３．書名 『つなぐ世界史』3　近現代/SDGsの歴史的文脈を探る	

〔産業財産権〕

〔その他〕

諸外国における歴史授業実践
https://history-lessons.site/
子どもにとって「自分事」な歴史授業の実現をめざして～日・米・英・独等の事例研究～
https://www.seikei.ac.jp/university/research/introduction/2021/11544.html

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考
研究分担者	宮本　英征 (Miyamoto Hideyuki) (10825293)	玉川大学・教育学部・教授 (32639)	

６．研究組織（つづき）

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考
研究分担者	空　健太 (Sora Kenta) (30548285)	国立教育政策研究所・教育課程研究センター研究開発部・教育課程調査官 (62601)	
研究分担者	中村　洋樹 (Nakamura Hiroki) (30824651)	四天王寺大学・人文社会学部・講師 (34420)	
研究分担者	宇都宮　明子 (Utunomiya Akiko) (40611546)	島根大学・学術研究院教育学系・准教授 (15201)	
研究分担者	服部　一秀 (Hattori Kazuhide) (60238029)	山梨大学・大学院総合研究部・教授 (13501)	
研究分担者	竹中　伸夫 (Takenaka Nobuo) (60432704)	熊本大学・大学院教育学研究科・准教授 (17401)	
研究分担者	田中　伸 (Tanaka Suguru) (70508465)	岐阜大学・教育学部・准教授 (13701)	
研究分担者	原田　智仁 (Harada Tomohito) (90228651)	滋賀大学・教育学部・研究員 (14201)	

７．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計0件

８．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関